

2018年

7月10日  
第316号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園  
宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地 1  
〒884-0102 TEL 0983-32-2025

## 一人ひとりの使命感

園長 児嶋 草次郎

西日本各地で大雨が降り、死者や行方不明者が大勢出ています。亡くなられた方々には御冥福をお祈りいたします。また災害に合われた方々には御見舞い申し上げます。この数年、かつてその地で経験したことのないような天災がおきるようになっていますが、これは一体なんなのでしょう。地球を痛めつけている人間に対する自然からの逆襲でなければよいのですが。

7月8日（月）、児嶋虜一郎・登美記念式は無事に厳粛に取り行うことができました。前日、大雨の中、保育園の職員、友愛園の中・高生の子供たちと一緒に、お墓掃除やテント立てなど、びしょぬれになりながら行いましたが、この大自然から、洗礼を受けている気分で作業を行いました。

「天は父なり」、この大自然の前で謙虚に生きていきたいと思います。以下、記念式の時の挨拶です。

本日は、児嶋虜一郎・登美記念式にご出席くださいましてありがとうございます。理事長として一言、御挨拶申し上げます。

今日は、単なる個人の記念式としてだけではなく、石井記念友愛社の創立記念の日として位置づけていまして、友愛園の子供たち職員たち、そして、友愛社の経営する保育園や他の施設の職員たちも多く参加してくださっています。今日は、創立の原点に立ちかえって自らのこれからの使命を考える日であります。

私たちはそれぞれに導きがあり御縁があり、石井記念友愛社で働いたり生活したりしています。その組織もこの10年ほどで大きくなり、施設の数も20を越え、職員の数も300人を越え、子供たちなど利用者を入れると1000人を越える団体に成長して来ています。

もともとは、石井十次の作った岡山孤児院が石井記念友愛社の原点ですが、岡山孤児院は大正15年に一度解散し、20年間の休眠状態があり、昭和20年、日本が太平洋戦争に負けて、戦災孤児救済を目的として新たに事業を再開し、

それから 73 年目であります。

石井記念友愛社としては 73 年の歴史と文化を築いて来ています。その歴史と文化を築いてくださった先人たちに、敬意と感謝を表したいと思えます。その中で、やはり創立者の決意とそれを支える存在が一番重要であります。

先日、友愛通信でも紹介させていただきましたが、柿原政一郎先生の導きがなかったら、児嶋虬一郎も石井十次記念のこの事業を再開することはありませんでした。そして、児嶋虬一郎の決断によって、まず石井記念友愛園の子供救済事業が始まりました。それを支えていたのが児嶋登美でした。

終戦直後、国土は焼土と化しており、食べるものはなく、アメリカからの支援物資（ララ物資）でなんとか生きのびることができました。必死になってやったこともない農業に子供たちとともに精を出し、お米やサツマイモを確保できるようになりました。私は戦後 4 年たった昭和 24 年に生まれましたが、この昭和 20 年代の貧しさは、今では考えられないほどでした。

今、友愛園の子供たちは、毎日、朝、昼、晩、魚や肉でお腹いっぱい御飯を食べることができますが、当時は、御飯が足りずにお湯で薄めてお粥にしたり、味噌汁と御飯だけという日も多かったのです。唐イモのつるも食べました。肉を食べようと思えば、飼っていた貴重なニワトリを殺す以外ありませんでした。子供たちも泥だらけになって働いて、ようやく日々の食糧を確保できました。大人も子供も必死に生きていました。

その後、日本も復興し、生活も少しずつ豊かになっていきました。児童養護施設一つからスタートした石井記念友愛社も、地域の福祉的ニーズに答えながら、組織として徐々に成長し、施設の数を増やしていきました。

この 73 年の間に世代交代もなされ、児嶋虬一郎も登美も、そして、当時働いていた多くの職員たちも亡くなっていきました。また、御縁があり支援くださった方々の多くもこの世を去っていかれました。

私は 2 代目の理事長として、この石井記念友愛社で働かせていただいています。この 73 年の歴史と文化を築いて来た石井記念友愛社を、これからいかにして次の世代へとバトンタッチしていくのか、という課題が最重要課題となって来ています。

世代交代は、人が変ればすむというような単純な問題ではありません。乗り越えなければならない課題が三つあります。

①「天は父なり、人は同胞なれば、互いに信じ相愛すべきこと。」石井十次が最期に残した言葉が、現在石井記念友愛社の理念であります。この理念を、いかに現代の社会状況の中でアピールしつつ変質させないままに次の世代の

人々に継承していくのかという課題。

- ② 田舎の一社会福祉法人として地道に活動してまいりましたが、この大きくなった組織を、現代の様々な価値観や規制にキチンと対応していける盤石な組織として生まれ変わらせること。
- ③ 次の世代へ向けて石井記念友愛社を背負っていける人材を確保・養成するという課題。

①の理念、言い変えるならば、石井十次の福祉文化の継承につきましては、現在、危機的状況に立たされていると言ってもよいと思います。その原因を一言でいうならば、グローバル化の波であります。日本の福祉の歴史や福祉文化について関心のない学者や政治家たちが、世界標準に近づけようと、画策しています。社会的養護養育の改革がまさにそれです。また、社会福祉法人改革以降、全国一律に規制するマニュアルが全国津々浦々の組織を標準化しようとしています。「地域における公益的な取り組みを実施する責務」という大義名分の名のもとにです。

そこに、石井十次を初め戦前の先人たちの福祉の世界を開拓していく戦いや、戦後の我々の先輩たちの自らの存在と命をかけた貧困との戦いの歴史や、福祉文化等は無縁で、また、福祉に関わる一人ひとりの職員の使命感を問われることもない所で、小手先のマニュアルで地域と向き合うように指導しようとしているようにも見えてしまいます。

「天は父なり、人は同胞なれば、互いに相信じ相愛すべきこと」という言わば石井十次が最期に残していった言葉(遺言)を、この石井記念友愛社に関わる我々一人ひとりが、どう受けとめ、どう解釈し、自分の使命としてどう仕事・生活に生かされていくのかということからスタートしなければなりません。そうすれば理念や福祉文化の継承は成功するのだと思います。

昨日7月7日、実はうれしい出来事がありました。友愛園の小学6年生の音々さんが、西都市青少年健全育成市民大会で、茶臼原小学校の代表として意見発表したのです。この「天は父なり」を引用して、素晴らしい内容の話をしてくれたのです。皆様もぜひ読んでみていただきたいと思います。

②の組織の問題は、石井記念友愛社の一番の課題かもしれません。施設の数が増えるに従って、その組織を統括し、管理・運営する能力も高まっていかなければならないのですが、追いついていないというのが現状であります。この1、2年、トラブルも発生しています。先ほどの社会法人改革では、「ガバナンス(統治)の強化」とか「透明性の向上」とか「財務規律強化」というようなことが問われています。組織として生き残っていくためには、必要な条件であります。幸

いなことに、今年度これらについては、県より特別の指導をいただけることになっており、ピンチをチャンスとして、なんとか脱皮したいと願っております。

③の人材の確保と養成の課題につきましては、最近希望を抱かせる出来事がありましたので、紹介します。石井記念友愛社後援会「石井十次の会」都城支部総会が都城市内で開催され、70人ほどの支部会員の皆様の前で、友愛園卒園生の現在九州保健福祉大4年生の彰彦君が、1時間半、自分の志について話をしてくれました。感動的な話をしてくれました。石井十次の福祉文化をしっかりと自分のものにしていても感じとれました。うれしいのは、いったん県外に修業（就職）に出るけれども、近い将来、友愛社で働きたい、子供たちの自立のために役に立ちたいという志をしっかりと持っているということです。彼だけではありません。同じ4年生の愛沙美さんも、卒業後友愛社で働きたいという気持を持ってきています。現在12名が大学学んでいます、他にも卒業後、友愛社で働きたいという志をもってきている大学生がいます。また現在、友愛園の高校生一人ひとりと私は面談をし、将来の目標について確認をしているところですが、高校生の中にも、将来友愛社のスタッフになりたいという夢を持っている者がいます。こうして、友愛園の子供たちの中に人材が育っているということは、私にとってはとてもうれしい希望です。

この三つの課題について、真摯に取り組んでいくことを、児嶋虬一郎・登美の墓前においてお誓いし、理事長としての挨拶とさせていただきます。大人・子供、それぞれの立場で、今日の三つの課題について考えてみていただければありがたいです。時代の大きな節目・変り目において、一人ひとりの使命感が問われているように感じます。本日は、ありがとうございました。